

平成 13 年度津波防災対策現地調査報告

1. はじめに

研究会において、毎年 1 回実施しております津波防災対策現地調査を 9 月 27 日～29 日の行程で実施した。今年度は、私たちが対象としている東海・東南海・南海地震津波のエリアと並ぶ津波常襲地帯である三陸沿岸を対象に、津波痕跡と津波防災施設の現地調査を行うとともに、行政（自治体の）取り組みについてヒアリングを行った。今年度は 26 名が参加し、充実した現地調査を行うことができた。調査内容の概要を参加者の感想も添えて報告する。

2. 調査概要

(1) 実施年月日

平成 13 年 9 月 27 日（木）～9 月 29 日（土） 2 泊 3 日

(2) 調査コース



1 日目 (9/27)

各地から仙台駅に集合 陸前高田（チリ津波対策事業） 大船渡防波堤
綾里津波痕跡 釜石（泊）

2 日目 (9/28)

山下文男氏による講演 8:00～9:30
釜石発 釜石港津波防波堤 宮古市・津軽石水門 田老町（津波痕跡、防潮堤防、監視システム） 田老（泊）

3 日目 (9/29)

田老発 小本川水門 盛岡・仙台で解散

(3) 参加者

井上達明、田原康司、藤尾武明、奥田朗、桜本弘、河田恵昭、伊永つとむ、田中洋、福原豊治、鈴木善光、都築貴志、榊原弘、西岡陽一、三原清一、森浦光一、浦口拓也、林壮一郎、宮内勇児、中西浩和、三原正裕、高橋智幸、吉田和郎、山形宙、水谷覚、木邑博英、溜本弘樹



全員集合 9月27日岩手県気仙郡綾里にて

* 綾里は明治三陸津波の時に、高さ38.2mまで津波が駆け上がった所である。その記念碑の前で撮影した。河田先生の右側が津波研究家の山下文男先生。



9月29日岩泉町小本川水門にて

3 . 調査概要

1日目(9月27日)

仙台に集合しバスで、東北自動車道を通り、一関から R243 で陸前高田に向かった。

陸前高田



陸前高田では、岩手県大船渡地方振興局・高橋課長にご案内いただき、川原川水門、海岸堤防(2線堤形式)、防潮林、防潮扉、監視装置、安全情報伝達装置などを調査した。ここで、三陸の津波研究家・山下文雄先生とNHK大船渡支局の山川記者と合流し、大船渡に向かった。

大船渡

大船渡は昭和35年のチリ津波で大きな被害を受けた所であり、チリ津波対策事業により湾口防波堤が設置されている(昭和42年完成)。三陸町の綾里に向かう途中、峠の展望台から大船渡の湾口防波堤を調査、写真撮影。大船渡市内の電柱や建物の壁面には津波痕跡の表示板、避難標識が見られた。



綾里



岩手県沿岸は明治三陸津波(明治29年)で死者18,156名に及ぶ大きな被害を受けたことは周知の通りである。中でも気仙郡三陸町綾里(りょうり)は村民の56.4%(1,269人)が亡くなっている所である。また、綾里では二つの湾を結ぶ小峠の上でぶつかったと言われる伝説の場所であり、津波痕跡高は38.2mに達している。私たちは白浜海岸の堤防や津波注意の標識などを調査し、伝説の峠に向かった。その峠付近には、津波の記念碑があり参加者全員で集合写真撮影をしました。日没となったため、宿泊予定の釜石市内のホテルに向かった。

2日目(9月28日)

前日に内閣府から東南海・南海地震の発生に関する長期的予測が発表された。その知らせに、メンバーの多くが朝から新聞に目を通し、気合が入っていた。(?)

山下先生の講演

山下先生には、明治、昭和の三陸津波とチリ津波に関する話を聞くことができた。特に、明治三陸津波の被害については貴重な写真や絵を見せていただき、いかに悲惨な状況であったが伝わってきた。また、次のようなことを強調されていたのが、印象に残った。

三陸では、津波防波堤、防潮水門、防潮堤防などの施設の整備が進められているが、構造物だけで被害を防ぐことはできない。施設ができたことで、安心してはいけない。地震や津波に関しては古くから伝わる迷信（“井戸の水が枯れると津波が来る”、“豊漁が続くと津波が来る”など）があり、間違ったことが信じられており、それが人の命を奪うことになる。

最近、鳥取西部地震や芸予地震の発生の予知に成功したなどということが、注目を集めたりすることが残念だ。



釜石港湾口防波堤

釜石港湾工事事務所（国土交通省）の佐藤課長のご案内で、現在釜石湾口に建設中の防波堤工事の現場を船で調査した。釜石港の湾口防波堤は世界最大水深（-63m）のケーソン式混成堤であり、中央部の300mを挟んで北堤（990m）、南堤（670m）が設置される計画であり、平成18年度の概成を目指して建設中である。また、事務所内において、計画概要、工事進捗状況、施工法についての説明を受けた。



- 河田先生は、調査に同行のNHK山川記者から取材を受けた。その結果は、当日の夕方テレビで放送された。

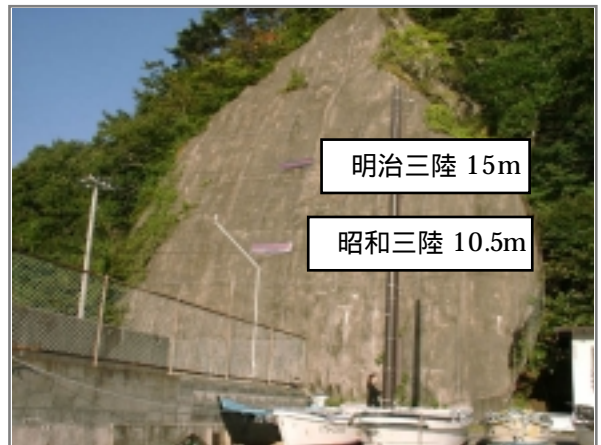
津軽石川水門

岩手県宮古地方振興局の小野寺課長のご案内で、津軽石川水門の建設工事を調査した。津軽石川水門は、宮古湾奥に注ぐ 2 級河川津軽石川の河口から約 2km の場所に設置される防潮水門（水門全長 189 m）である。平成 5 年度から始まった工事は、現在、第 1 期工事が進められており、平成 14 年に完成予定である。また、防潮水門の整備と並行して防潮堤防の嵩上げ（天端高 T.P.+8.5m）工事も進められていた。



田老町

田老町では、田老町役場総務課の大下係長のご案内で、津波痕跡の表示板と万里の長城を思わせるような津波堤防を調査した。津波痕跡の表示板から田老を襲った津波がいかに大きかったかを十分に実感できた。また、昭和三陸津波のあと、町民の努力により完成した津波堤防が町を取り囲んでいる姿にも驚かれた。現地調査を終え、町役場で田老町の津波防災に関する取り組みについて説明を受けた。



明治と昭和の三陸津波で壊滅的な被害を受けた田老町では、“家族の中に必ずと言ってよいほど津波で亡くなった方がいる”という話を聞いて、津波防災にかける熱意と真剣さが理解できるような気がした。



3 日目（9 月 29 日）

小本川水門

小本川水門は、2 級河川・小本川の河口にある防潮水門である。水門全長は 221m、防潮堤高は T.P.+13.3m で、



明治三陸津波を想定して設計されている。(明治三陸津波の痕跡高は 18m) 水門工事は昭和 54 年に開始され平成 2 年に完成した。

小本川水門の調査を終えて、盛岡を經由し、再び仙台に戻り解散した。

4 . おわりに

今年度は、三陸海岸を対象に津波防災施設の現地調査を行った。この調査を通して、三陸海岸の津波防災施設の充実ぶりに驚かされたが、明治以来 3 回の津波災害を経験し、津波と向き合うことが宿命となっている三陸海岸の厳しさも実感した。今後、私たちが立ち向かおうとしている東海・東南海・南海地震津波に対するハード対策については、大いに参考になると思われる。三陸海岸を 2 泊 3 日で縦走する強行軍で、参加者の皆様にはご迷惑をおかけしたが、その分密度の高い充実した現地調査ができたと思う。

最後に、津波防災施設のご案内を頂いた岩手県県土整備部河川課、大船渡地方振興局、宮古地方振興局、国土交通省東北地方整備局釜石港湾工事事務所、田老町総務課の皆様、ならびに退院後間もないところをおして講演頂いた山下文男先生に心からお礼申し上げます。

以上、事務局